

第3回 中心部震災メモリアル拠点検討委員会

- 日 時 令和元年5月16日(木) 17:00~19:10
- 会 場 市役所本庁舎2階 第一委員会室
- 出席者 植田今日子委員、遠藤智栄委員、大泉大介委員、佐藤翔輔委員、佐藤泰委員、志賀理江子委員、野家啓一委員、マリ・エリザベス委員、本江正茂委員
- 議 事 1 開会
2 議 事
 (1) 中心部震災メモリアル拠点のあり方について
 (2) 市民参加型イベント等の開催について
 (3) 今後のスケジュールについて
 (4) その他
3 閉 会

- 配布資料 資料1 第1回・第2回検討委員会の意見整理
資料2 市民参加イベント等の開催について
資料3 今後のスケジュールについて

○事務局（高橋室長）

定刻となりましたので、ただ今から「第3回中心部震災メモリアル拠点検討委員会」を始めさせていただきます。

本日は、お忙しい中お集まりいただきまして、ありがとうございます。

本日の議事進行につきましては、委員長にお願いしたいと存じます。野家委員長、よろしくお願いたします。

○野家委員長

それでは本日第3回目になりますけれども、検討委員会を開かせていただきます。

今回も机の並べ方を工夫していただきまして、アイデアをより活発に出していただけるように、前回と同様にホワイトボードを並べて、通常の役所の会議とは一風変わったしつらえにしてありますので、いいアイデアが出てくるものと思います。

傍聴の方をはじめ、皆さまにはあらかじめご了承いただきますよう、お願いたします。

それでは、会議は次第に沿って進めてまいります。まず、会議に係る留意点等につきまして、事務局から説明をお願いたします。

○事務局（高橋室長）

はい。それでは、はじめに傍聴の方へのお願いです。本日お配りしています「会議の傍聴に際し、守っていただきたい事項」をお守りの上、傍聴席以外に立ち入らないようお願いたします。

次に配布資料を確認させていただきます。本日は委員の皆さまのお座席に、次第と委員名簿、座席表、資料一覧、資料1から3を置かせて頂いております。資料の不足がございましたら事務局までお知らせください。

続きまして、委員の異動と本日の出席状況について報告いたします。

先月末をもちまして石垣のり様が委員を辞任されましたので、本検討委員会の委員は9名となっております。本日は、9名の全委員にご出席いただいておりますことから、要綱第5条第2項による定足数を満たしていることをご報告申し上げます。

それから、本日も議事録を作成いたしますので、ご発言の際にはお手元のマイクをお使いになってお話しください。

事務局からの留意点等は以上でございます。

○野家委員長

はい、ありがとうございます。それでは、議事に入る前に本日の議事録署名委員を指名させていただきます。今回は遠藤委員に、その前は石垣委員というように名簿順でお願いしておりますので、本日は植田委員にお願いしたいと思いますが、よろしいでしょうか。

○植田委員

はい。

○野家委員長

はい、ありがとうございます。それでは、ただ今より本日の議事に入らせていただきます。中心部震災メモリアル拠点のあり方についてです。まずは、第1回と第2回検討委員会における議論の振り返りを行いますので、事務局から資料の説明をお願いいたします。

○事務局（庄子課長）

それでは、第1回と第2回における意見の整理について、ご説明いたします。本日はこれをもとにブレインストーミングでお話ししていただくこととなりますので、よろしくをお願いいたします。

まずは資料1「第1回・第2回検討委員会の意見整理」をご覧ください。こちらの全てを細かくは説明しませんが、まず趣旨のところから説明させていただきます。

第2回検討委員会の議論をまとめさせていただくにあたりまして、ご発言のベースにある第1回のご意見も一緒に考えていくべきものと考えまして、資料の中に一緒に入れていただきました。下線が付いているものが第2回のご意見、下線の付いていないものが第1回のご意見です。先日の第2回検討委員会でお配りした資料「第1回検討委員会の意見整理」をベースにまとめていったところですが、事務局として少しまとめ方を変えた方がいいと思ったところがいくつかございましたので、先にカテゴリーのところを説明させていただきます。

大きなカテゴリーとして、「1 議論の進め方」、「2 東日本大震災の経験とは」、「3 仙台の特質と中心部の場所性から中心部震災メモリアル拠点のあり方を考える」、「4 伝承全般から中心部震災メモリアル拠点のあり方を考える」、「5 その他のキーワード」とまとめさせていただきました。このようにまとめた趣旨ですが、第2回検討委員会の際に、「何のために・哲学」、「何をしたい・ビジョン」、「コンセプト・手段」、「実現したいシーン」と4つに分類しながら議論を進めていただき、「4 伝承全般から中心部震災メモ

リアル拠点のあり方を考える」のとおり、いろいろな視点から伝承全般についてご意見をいただきましたが、そのご意見をまとめていく中で、伝承全般とは別に考えていかなければならないことがあると考えまして、それが「1 議論の進め方」、「2 東日本大震災の経験とは」、「3 仙台の特質と中心部の場所性から中心部震災メモリアル拠点のあり方を考える」というところです。

「1 議論の進め方」については、「①まず先に何をやる場なのか考える」、「②過去の事例に学ぶ」、「③他の被災地に聞く」が第2回検討委員会で「全体に関わる事項」として書いていた項目です。そこに前回のご意見でいただいた「④行政的な施設にしないという心構えが必要」、「⑤早い段階で将来のスタッフを巻き込んだ議論を」、「⑥拠点の検討と並行してすべきこと」、「⑦行政・メディア・市民・企業がそれぞれ“自分がやった”と思えるようなプロセスを経ること」を合わせ、「議論の進め方」としてまとめさせていただきます。

次に「2 東日本大震災の経験とは」です。伝承を考えていく中でいろいろなご意見をいただきましたが、その中で特に東日本大震災がどういった経験だったのかというところを、もう1つ上に出して考えていく必要があるのかと考えまして、「①未曾有の経験」、「②想像を超える出来事・全てを理解し得ない」、「③原発事故」、このような視点を「東日本大震災の経験とは」という括りでまとめさせていただきます。

そして、「3 仙台の特質と中心部の場所性から中心部震災メモリアル拠点のあり方を考える」です。こちらは、後ほど説明いたします伝承全般の部分についても、これを仙台で行うということで、問題提起に記載しておりますとおり「仙台ならではの機能も追求すべきではないか」というご意見を第1回検討委員会の際にいただいております。そして、今回もその視点で考えていきますと、仙台が「東北の拠点であること」、「市民力のまちであること」、「繰り返してきた災害の歴史があること」、そういったところから、コンセプト・手段、実現したいシーンなどのご意見をいただいております。

また、中心部の場所性について、読み上げさせていただきますが、「沿岸部と市街地を両方持つことが仙台市のユニークなところ。“中心部は現場ではなく、完全に発信に徹する場所”と捉えるか、“中心部も被災の現場であり、沿岸を支える現場でもある”と捉えるか、市中心部の立ち位置には2つの考え方がある」という問題提起をいただいております。この点から中心部の場所性について、「①震災当時の被災状況を感じられる現場ではないことを念頭において考える」、「②沿岸部のみならず全てが被災の現場」、「③他施設との関係性や活用を考える」、こういった部分が中心部というところを考えたときに背景となる部分であるという問題提起をいただいております。

そして、「4 伝承全般から中心部震災メモリアル拠点のあり方を考える」です。こちらについては、前回一番時間を割いてご議論いただいたところかと思えます。見出しのところだけご説明をさせていただきます。

「1 過去の犠牲を無駄にせず、世代を超えて東日本大震災の経験をつなぐために」、これが哲学になりまして、これについて何をしたいか、ビジョンの部分ということで、「①持続的な動き」、「②多様な経験／あらゆる人に受け入れられる物語」というご意見をいただいております。また、それをしていくためのコンセプト・手段ということで、「①持続的な動き」であれば、「①財源」、「②人・組織」、「③災害文化」、「④親から子に継承する遊びの場」というご意見をいただき、シーンとして「①日常的に話題になる機会」、「②災害をきっかけに生まれる行事」などのご意見をいただきました。

「②多様な経験／あらゆる人に受け入れられる物語」につきましては、コンセプト・手段として「①伝えるメディアの扱い方」、「②多様な経験の総体と個々の経験へのアクセス」、「③その人に応じた記録のキュレーション」、シーンとして「①居合わせた人同士が伝え合う」、「②写真を前に語り合う」というようなシーンが生まれるのではないかとのご意見をいただきました。

そして、「2 あらゆる危機を乗り越えるために」。このビジョンの部分ですが、「①市民のアクションにつなげる仕組み」、「②防災について学ぶ仕組み」、「③東日本大震災に留まらず、これから起こり得る災害や想定外があることを考える仕組み」、「④自然と人間社会のあり方を考える仕組み」、こちらのカテゴリーに沿ってご意見をいただいております。そして、それぞれコンセプト・手段につきましては、

そして、「①市民のアクションにつなげる仕組み」のところでは、実現したいシーンとして「①市民全員が災害の経験を共通の言葉で伝える」というのがあるのではないかといただいておりますし、「②防災について学ぶ仕組み」のところでは、コンセプト・手段として「①中心部は防災や災害対応に特化する」というのもあるのではないかといただいております。「③東日本大震災に留まらず、これから起こり得る災害や想定外があることを考える仕組み」のところでは、例えば「①モニュメントのような象徴的な存在を通じて想像を超えることがあることを伝える」ということ、「②震災を目の当たりにしたことが想像の範囲を広げる経験でもあった」、そのようなご意見をいただき、実現したいシーンとして、「①モニュメントを通じて親から子に伝える」、というのもあるのではないかといただきました。そして、「④自然と人間社会のあり方を考える仕組み」、こちらについては、むしろビジョンのところを考えなければならない視点としてたくさんのご意見をいただいております。コンセプト、シーンについては、これから出てくるかと思えます。

そして、「3 都市の未来のために」。これは震災だけの視点ではなく、時代的役割、街のランドデザインの中での役割を踏まえた検討が必要ではないか、そして過去を忘れずにおくことが未来に何をもたらすのか、そういったような部分をいただきました。このビジョンとしては、「①災害文化・アイデンティティを創造する仕組み」。それを実現するコンセプト・手段として、「①災害の経験を整理し続け、世界に共有していく活動の拠点」、「②今後の対策を考えるためのネットワークの拠点」というようなご意見をいただいております。

そして、「4 伝承一般」について、哲学のところは入れておりませんが、伝承一般で忘れてはならないものということで、「①現場・人・物のセット」、「②アーカイブ」、「③多くの人を訪れる」というご意見をいただきまして、そのコンセプト・手段として例えばアーカイブであれば「①組織やコミュニティ、企業を巻き込む」、「②方法論と極めて長く地道に取り組む覚悟が必要」、「③アーカイブを通じた被災地の連携が必要」、このようなご意見をいただいております。また、「③多くの人を訪れるために」ということで、コンセプト・手段として「①人が来るための身近な仕掛け」、「②子供が周りで遊べるモニュメント」、「③複数の要素を戦略的に分けて考えること」、シーンとして「①リピーターが訪れている」、「②市民が外から来た人を案内する」、「③日常空間として人が集いつつ、特別な日だけ厳粛な空間に包まれる」、このようなご意見をいただいております。

そして、「5 その他のキーワード」としたところについては、以上のカテゴリーには入れられなかったのですが、「震災時のさまざまなシーンの舞台は“路上”だった」、そ

ういった言葉がございまして、今後のキーワードになるところがあるかもしれないと思いましたが、キーワードとして残させていただきました。

このようにまとめまして、ご覧いただきますと、例えばコンセプト・手段や実現したいシーンのところで、まだ入っていないところもございまして。また、もしかするとグラデーションがあって、ここの部分はコンセプトとも言えるのではないかとか、あとは要素の部分でこちらのところも関係があるのではないかとか、そういったようなところもあるかと思っております。

この後の議題で詳細をご説明いたしますが、8月に市民の方にご参加いただくイベントを開催し、また、この検討委員会では傍聴者の方は発言できませんとお断りをしておりますが、市民の方も発言ができる市民参加型の検討委員会を9月に開催する予定にしております。8月の市民参加イベントをはじめとして、市民の方と一緒に考えていくために、この表にあるようなところを意識していただきながらも、今回の議論を通じて、ある程度のあり方・方向性がお話しできるような内容になっていくとよいのではないかと考えております。空欄を埋めていき総花的なものをつくればよいということではなく、恐らく濃淡が出てくるのかと思っております。その濃淡を考える際に、「東日本大震災の経験」や「仙台の特質」、「中心部の場所性」などが重要な視点になるかと考えております。

事務局からの説明は以上です。

○野家委員長

ありがとうございました。これまで2回の議論を大変よく整理してまとめていただきましたので、大体1つの議論の流れが一望できるような格好になっているかと思っております。

それで、早速皆さまからアイデアをいただきながら、この施設のあり方の議論を進めていきたいと思っておりますが、今回で3回目になりますし、時間も無限にあるわけではないので、今回は全面展開というか、拡散できるだけいろんな意見をいただいたと思っておりますので、今回は少し、もちろん広がってもいいんですが、収束するような形で、あるいは既に出た意見に付け加えるときはちょっとそれを深めるような形で議論を出していただければありがたいと思っております。

それで、ここからは前回に引き続いて進行役を本江副委員長にお願いしたいと思っております。前回、水際立ったファシリテートで我々感動いたしましたので、それでは本江副委員長、よろしく願いいたします。

○本江副委員長

僭越ですけども、再び本江でございまして。前回に引き続いて、話の取り回し役をやらせていただきたいと思います。皆さんが大変にカジュアルな格好で来てくださったのは、よいことです。大事なことを考えるときにはちょっとリラックスしてないといけないので、そういうふうに行きたいと思っております。

今日の資料は、あらかじめ見ていただいていると思っております。あんまりこんなにガチガチにはしないのが多いと思っておりますけれども、丁寧にまとめてくださっていると思っております。今回は割とわかりやすくフレームワークをつくって、議論のレベルの抽象度の高いのから具体的なところまで分けながら話すというようにして、それを踏まえながら大きくストーリーをつくっていただいております。とはいえ、そんなにバランスよく話すというようには前回もやっていないから、丸ごと浮いているか、こちら辺の話は同じようなこ

とばかり言っていて、レベルをやっぱり意図的に変えないとダメなところもあるようで、このあたりにまだ少し話さなきゃいけないことがあるかなという感じを皆さんそれぞれに持っていらっしゃるものと思います。

委員の皆さんが放っておいてもしゃべるといふ方々ばかりなので、今日も僕はあんまり心配していません。先ほど委員長からもありましたが、丁寧によくまとめられている枠組みになっていると思いますので、基本的にはこれを尊重しつつ、皆さんが自由に前回に補足できるような格好で進められればと思います。

大きく言うと、1番に「議論の進め方」の話があると。議論の進め方自体がメモリアル施設のあり方に関わっているというのが結構重要な構成で、ここにまたサブ項目があります。これからのプロセス、8月、9月に市民の皆さんと話す会をつくりますよみたいなことも入っていますし、これからの議論をどういうふうに進めていくのかということ自体についてのアイデアもたぶんもっと必要です。

それから2つ目は、そもそも我々の東日本大震災の経験、伝えていくべきことというのは何だったのかというレベルですね。これはだいぶ抽象度の高い話になる部分が多いと思います。あと、特に言わないといけないのは、原発事故の話がこの中に入っていて、前回も委員長から特にリクエストがありましたが、原発事故のこと、福島の問題を我々はどういうふうに扱うのかということについても、もうちょっと言っておかないといけないねと。今のところ考えたいという話しかないの、どういうことをする必要があるのか、あるいはあえて扱わないなら本当にそうなのかみたいな、あるべき態度についての議論がこの中では出てくるだろうということがこの2つ目の話。ちょっと抽象度の高い話です。

その上で、大きく2点の話が残っています。1つは仙台です。メモリアル施設一般の議論をしているのではなくて、この仙台市でやるという話ですので、なぜ仙台市がそれをやるのか。かつ自治体の仕事として、端的に言えば税を使ってこうした活動をやることの意味は何か。もっと経営的に言えば、やるからには何らかの、言葉は微妙かもしれないけれどもメリットはあるのかということについて、我々がなぜそれをやるのか。しかも、民間団体ではなく行政が税で行う理由についての話がもうちょっとあってもいい。仙台であることの意味を言うときに、それは東北の中、あるいは日本の中、被災地の広がりの中で仙台が特別な役割を持っているならばそれは何かということでもあるし、もう一つ仙台の中の問題として沿岸部と中心部の場所性の問題も、仙台を考えるということの中に出てくると思います。つまり、日本、東北の中での仙台、もう一つは中心部と沿岸部のバランスの話、これはもとの委員会報告でも位置づけられているところでもあります、ここの中心部だからやらねばならない、だからやる必要があるという話が3の[1]、[2]の中に出てくるといふことがあります。

もう一つが伝承のこと。4番です。4番がおおむね最後のところ、これは伝承ということで、そこでは具体的にどんな役割を果たすためにどんなことが行われるのかを考えると。ここも大きく4つありますね。

4の[1]が「過去の犠牲を無駄にせず、世代を超えて東日本大震災の経験をつなぐために」、普通の意味でのメモリアル施設の役割はここです。

[2]の「あらゆる危機を乗り越えるために」、東日本大震災を超えて、より一般的な都市に起こり得る危機というものにどう対応するのかということまで視野を広げて考えなきゃいけないんじゃないかという話も結構出てきています。

[3]の「都市の未来のために」は過去を刻印しておくための施設にとどまらず、これは[2]とも関係がありますが、仙台の未来のために、あるいはより大きく言うと人類の都市の未来のためにこれはどういう寄与をするのかというのが[3]です。

[4]の「伝承一般」は伝承するということはもうちょっと一般的にどんなことをしなくちゃいけないのかということで、伝承ということについていろんな、少なくとも4つぐらいの視点が出てきていると。

仙台と伝承のほかに5番の「その他のキーワード」、前は「路上」という話が出ていて、いろいろなもの、それは路上で起こりましたと。という、いろいろなものをそこに集めてくる、求心力を持ったワードとして、例えばそれは展示のプランニングのアイデアのもとになったりとか、いろんな使い方ができるとは思いますけど、それに関わるようなことは何かないだろうかということです。ざっとホワイトボードに書きましたが、ここまでで今日事務局のほうで整理をしていただいた枠組みをフォローしつつ、話を確認したところです。こんなような話をしていかななくちゃいけないと。

それで先ほどもリクエストがありましたように、仙台なんだよということをもうちょっと掘り下げておきたい。大事なことだけどそれ俺たちがやるの？みたいなことの中で、もっとちゃんと議論が必要だというのは特にリクエストがありました。それから、原発をどうするかということも特にリクエストがあったことの1つ。それで、抜けている部分はほかにもあるよねということで話をしていきたいとします。

このフレームワークの確認はここまでで、あとは皆さんが改めて考えることをそれぞれにお話しただいて、それは大体こちら辺に来るねとかいうふうに話をしていければいいかなと思っています。いいでしょうか。それで時間まで、準備をしてこられたお話もあると思いますし、ここの場で触発されて出てくる生々しい話もぜひ伺いたいですので、皆さんからお話を伺っていければと思います。

手元に付箋があると思うので、キーワードだけでも書いていただくと僕が貼りやすいので、助かります。

ということで、2〜3分、このことから話そうかなというのを準備していただいて、その後は自由にお話を伺うようにしたいと思います。それで、特に分節はしないでワーツと話をして、18時45分とか50分とかぐらいですね、だから1時間20分ぐらいで話をしたいというふうに思っております。進め方についてはよろしいですかね。

では、少し時間をとりたいと思います。皆さんでまずここから切り出そうということでお話をいただければと思います。まず考えてください。

(約2分間の考える時間)

○本江副委員長

では、そろそろ。どなたからでもお話をいただければいいのですが、もうちょっと待ちましょうかね。この間は抽象的、具体的な分け方だったけど、これはトピックの枠ごとなので、抽象度の高いこと、具体的なことみたいな話で軸が変わったというふうな感じで見ていただければと思いますが、いいかな。はい、じゃあ遠藤さんから。

○遠藤委員

仙台の拠点性ということと関連すると思うんですけども、東日本大震災の全体像と

いうのか、津波の被災地なんかを訪れると、地域、地域の記録はあっても全体像というのが書かれていないケースが多いと思うので、やっぱり拠点である仙台として、そういう全体を伝えるという役割があると思います。それを考えると、やはり原発を扱う必要はあるんじゃないかと。ただし、全体性について、どの項目をどのレベルまで表現するか、どういう手法で考えるかというのは再検討が必要かなとは思いますが、仙台だからこそ拠点性と全体性を考えることが必要だと思います。

○本江副委員長

ありがとうございます。全体像を知ることができるようなところ。今はそれぞれの地域の話は示しているものがありますが、全体がある。「でも、それは国がやればいい」みたいなことなので、何で仙台でやるんですかというのはどうですか。一番大きいまちだから？最も典型的な被害があるから？全体像はどこかで示せるといいですが。

○遠藤委員

国はやってくれるんですか。

○本江副委員長

僕は答える任にありませんが、国はメモリアル施設をつくるとか言って公園もつくるけど、県ごとに1個つくとかいう何か煮え切らない感じでやっていますよね。

○遠藤委員

そうですね。各県にね。

○本江副委員長

何か全体像を知るには「これ！」みたいなのは今のところ構想は出されていないかと思いますが。

○遠藤委員

そういう各県の拠点には全体像がちゃんと載るということになっているんですかね。

○佐藤（翔）委員

どれくらいかはわからないですね。たぶん規模的には各県とか。

○遠藤委員

あと議論の中で、仙台からすぐに出かけられるわけじゃないけれども、そういった「つながり」という意味合いがあるんじゃないかということを見ると、やっぱり全体性の中に入ってくるのかなという。そういう意味では、やっぱり国の状況というのは知る必要はありますよね。

○本江副委員長

そうですね。あんまり話していないけれども、役割分担のことはあるね。宮城県のほうだってあるんだからさ。それとかぶってもいけない。かぶっちゃいけないというこ

ともないんだけど。

○遠藤委員

宮城県は何をどの程度やることになっているんですか。

○佐藤（翔）委員

僕も話す立場じゃないんですけど。宮城県なら公園はありますよね。公園は国なり県なりがやって、その中にある建物は県と市がやっているような位置づけなんですね。だから、あるにはあるけれども、3 県横串にしたものはたぶんどこにもないんじゃないかなというのが現状ですね。

○本江副委員長

現実としてはそうですよね。でも、さっき言ったように普通に納税者から見ると、国と県と市で3階建てでつくって、バカじゃねえのっていうのが当たり前に批判のあり得るところで、その中で仙台市としてやるんですっていうことには何か強いステートメントがないと、やっぱり無駄じゃないのっていうのはあるよね。それはどうすればいいの。何か特別な、仙台市は。はい、どうぞ。

○大泉委員

その三層構造はもっともなんですけど、でもユーザー目線とか、来館というか拠点を訪れる人の視点に立てば、それは石巻まで行ってもらわなきゃならないです、陸高まで行ってもらわなきゃならないですっていう話は違うんだろうなと思うんです。仙台がそこまでしゃしゃり出る必要があるかどうかという感覚ではなくて、訪れる人からすればそこでワンストップで多くのことを学びたい、知りたい、感じたいと考えるのが当然だと思うので、私はむしろやっぱり東日本大震災とは何なのか、それをどう象徴するかはあれですけど、ざっくり言うと津波被害がやっぱりシンボリックなことですし、もう一つはやっぱり犠牲が多かったということが、僕なりにはやっぱり津波と犠牲者の多さというのをちゃんと仙台が、東北の玄関口である仙台が、ましてやまちの中心部であるところで全体像がしっかりと示されるということは、ほかのところは何があるからというのを付度して、減らすとかという話ではないのかなという感じがします。

○本江副委員長

報告書にもゲートウェイという言い方をしていたかと思いますがけれども、簡単に言ってやっぱり一番来やすいというか、まず玄関口になるのは交通網からしても事実であって、そこから全体像を見て、個別のいろいろなところ、ほかにもあるところとつなぐ責任というか役割はあるからということと言えるかもしれません。ありがとうございます。はい、翔輔さん。

○佐藤（翔）委員

福島のごとは、全体像という位置づけもあれば部分という位置づけもあります。仙台市の中のごとで考えると、我々専門的には「災害」って出た被害の部分とその後やらなきゃいけない災害対応の部分を含めて「災害」と呼ぶんですね。そのときに、災害の

後にやらなきゃいけなかったことの中に、福島からいらした県外被災者を受け入れたという事実が仙台にあると。1位か2位かどうかわからないんですけども、かなりたくさんの方が市内におられて、私の当時の近所にもいました。しかも、そのことを隠されていました、福島から来たということ。そういったこともこの仙台で起きたことと踏まえれば、そのことを取り入れるのは当然なのかなというふうに思いました。

○本江副委員長

ありがとうございます。関連して何かあれば、はい、どうぞ。

○マリ委員

私、ちょっと図を書いて、やっぱりオール東北ということを考えて原発は入るということに賛成しています。

あと、たぶん仙台のアイデンティティということ、仙台だからつくってということとちょっと逆な考え方、仙台なら何がつくれて、何を入れるべきとか、ちょっと考え方が逆かもしれないんですけど、歴史と文化、日常生活と災害を密に入れたほうが良いということで、ちょっと事例を言うと人と防災未来センターが防災のことに絞っているということで、中越のメモリアル回廊がいろいろないい意味で組み合わせで、たぶん仙台なら歴史とか文化とかに強い部分があるから、仙台ならすばらしいものができるということは「なぜ仙台？」ということとちょっと逆の考え方があるかもしれないので、少し関連しているか、先ほど翔輔先生が言ったのとちょっと似ているんですけども、3.11は何がありましたという事実とか被害状況とか情報をきちんと記録して伝えている役割が中心なんですけれども、その前に昔の災害とか勉強できるものをつながらないといけないので、その上に防災とかこれからのことはたぶん全部の機能、ファンクションを持つことが必要で、それが機能というか、ちょっと具体的にもしモノをつくるとか、住民にそういうものをつくったらどうですかということに、建物を考えて、ちょっと防災ゾーンとか、3.11ゾーンとか、歴史のゾーンとかというふうに入れるかということ、具体的なことはちょっと考えた。

○本江副委員長

ありがとうございます。これね、三重のベン図になっていて、ヒストリーとカルチャー、デイリーライフとディザスターというのがあって重なっている部分のところにあるよという話だった。僕の理解で言うと、小さく考えればディザスターのことだけ紹介すれば役割は果たせるのだけれども、でもそれだと災害を捉えたことには本当はならないから、その場所の歴史とか、デイリーライフ、これは未来のことも含んでいる、そういうものとの重なり合うところまで広げて扱わないといけないですよ。そのときに、仙台市みたいにもう既に市民活動の活発なものがあるとか、あるいは博物館とか大学とかそういうものを扱うポテンシャルのある施設や機能が仙台市にはあるから、これを丸ごと引き受けて、ちゃんと重なり合いの問題として見せることができる能力があるから、それは誰かがやらなきゃいけなくて、それを仙台市でやるんじゃないのと。国はまたもちろんやるんでしょうが、もうちょっと違うスコープになるので、特にデイリーライフの問題なんかを扱うんだったらそういう基礎自治体で、でも大きい能力があるところみたいな、何かそういう、やらなくちゃいけないことがあって、誰もやれないのだとする

と我々でやらなければならないというような感じですかね。その構図、その広がりのことのお話をいただきました。原発もその中のやらなくちゃいけないことの中に入ってくるよというような、そういう理解で。どうでしょうか。野家先生。

○野家委員長

沿岸部と中心部、中心部という概念をもうちょっと考えてみる必要があるかなと思っ
ていたんですけども、確かに仙台は地理的には東北の中心にあるし、今回の被災地域
を考えても中心にあるんだけど、3.11の8年目のときにテレビなんかで被災地とし
て取り上げられるのは基本的には石巻とか気仙沼、それから福島。だから、仙台の被災
状況が取り上げられるということはまずないんですね。その意味では、被災の中心地で
はないわけです。ただ、石巻に行くにも気仙沼に行くにも、あるいは福島に行くにも仙
台を經由して行くということがかなり一般的なルートになっていて、その意味ではさっ
き玄関口と、あるいはハブみたいな役割を果たしている、その意味ではやっぱり被災全
般を見渡すための中心地になり得るロケーションだし、それから同時に仙台市自体も被災
しているわけです。沿岸部を含みますから、若林区とか宮城野区も仙台市ですから、
だからそういう意味では被災地であると同時に情報発信の、それから交通アクセスの中
心地でもあるという、そういう二重性というか、その二重性をうまく生かすことができ
るような形でこのプロジェクトが進んでいけばいいかなと考えたんですけども。

○本江副委員長

そうですね、今の二重性、あるいはハブになっていますよという話。

○野家委員長

だから、単なる中心部だと上から目線で被災地を見渡すことになるから、やっぱり自
分自身も痛みを感じているということを少し前面に打ち出していかないと、その施設の
持っている意味というのが。

○本江副委員長

そうですね。これちょっと僕の話にもなっちゃうけど、被災の中心地ではないという
言い方は結構難しい側面があります。今いろいろな意味で起こりつつあることの一つだ
と思うのは、あえて言いますが、被災地の十字架を誰かに押し付けて、うちらはそうい
うのはもう終わりましたって言いたいみたいな態度を感じることがある。それを順番に、
うちと比べるとあんたのほうがまだちょっと被災が大変そうだから、十字架を渡して、
僕らはもう大丈夫ですみたいにして、じゃあ最後に誰がそれを持たなくちゃいけなくな
るのかというようなことがもしかすると起こり得て、悪いけど福島は最後の一人になる
可能性がすごくある。だから、我々は被災地の中心ではありませんという言い方はダブル、
トリプルでいろんな意味があって、上から目線じゃない、謙虚なのだという言い方
もある一方で、ずるい言い方でもあって、そういう構造の難しさみたいなことがあるか
なというのを思っていました。原発のことをどう扱うかということの中で、被災の一番
深刻さを最後まで引き受け続ける土地に事実としてなるでしょうから、そこの関係を
どう取るのか。僕たちはもう大丈夫だけどあなたたち大変ですねみたいな構えだと、倫
理的にもよくないし、本当の事実ともちょっと違うようにも思うので、そういう扱いの

ことやなんかが難しい。二重性というお話がありました。その中に入っているかなという感じを持ちました。すみません、司会だけ話しました。はい、志賀さん。

○志賀委員

二重性とか、さっきマリさんがおっしゃっていたディザスター、ヒストリー、エブリデーライフ、カルチャー、その辺のやっぱりいろんなレイヤーがものすごくかぶっていて、そのことを拠点としてどう引き受けられるのかというのが、やっぱりハブである仙台でというふうに考えると、やっぱり人がいっぱい集まるみたいなことがあると思うんですけど、そのときに仙台市でありながらインディペンデントなメディアを立ち上げられないかという考えがあって、これはいろんな政治的なことをあまり知らない私が無知で言っているというように思われたくないですが、ただ原発のことに関しても例えば実際にそういうことがまた今後起きたときに、現実の情報が知りたい。今どれぐらいどこに放射能が降っていてとか、または今回福島で起きたことからどれぐらいの汚染があるとか、うちの土壌はどれぐらいのセシウムが検出されたか、そういういわゆる市民団体の方が実際にそういう測れる機械を買ったりして、実際に土壌を持っていくと検査してくれたりするような機関がありますが、そういうところの現実の情報っていうのを、いわゆるいろんな利害関係なしに公平に知りたい。だからそういうふうなことを考えたときに、インディペンデントなメディアであるような拠点が仙台市にあるとしたら、例えば今後何かあったときにそこにまず情報を求めるようになったりとか、もしくはそこに人が集まるようになったりとかというようなことを考えます。これってどういう感じのかな、ハードなのかと思うとハードでもないような、と思ったときに、どこかラジオ的なものなのかというふうに思っていて、やっぱり当日テレビが見られないとか、すぐ情報が得られなかった人がたぶん一番ラジオで大きく情報を知った、津波が来るとか、一番早かったと思うんです。だから、インディペンデントなラジオのようなものをつくるという、そこだと例えば時に抽象度の高い音楽のようなものであったりとか、具体的な情報であったりとか、もしくは個人個人のオーラルヒストリーであったり、もしくはこれまでたくさん集められたアーカイブだったりとか、そういうものを生かしていけるんじゃないか、もしくは原発のことも福島の現場で何が起きているかということと情報をやりとりしてみたいなことができるんじゃないかなと。もしくは全体像もそこで積極的に発信するというか。どうでしょう。

○本江副委員長

ラジオ。仙台市がこういう構造の中、基礎自治体で、たぶんメディアと言っているのはメモリアルのこの拠点自体のことですよね。メディアとして機能する、そのインディペンデンスによって、ある信頼性を得る。

○志賀委員

どういうふうに信頼を得ていくのかというのは、やっぱりそこで動く人たちが信頼を得ていかなきゃいけない、努力しなきゃいけない部分だと思うんですけど。

○本江副委員長

そうですね。予算とかとも関係があるよね。誰の金でやっているんですかみたいな話

でもあるもんね、インディペンデンスってね。

○志賀委員

そうです。

○本江副委員長

仙台市で引き受け切れるのかみたいなことでもありますけど、でもそういうことがありますよね。情報発信をして、僕らはたくさんそういう経験をしたから、それは誰のお金で誰が誰に向けてどうしたいと思って発信している情報なのかというのを気にしながら見るようなことになっていって、そのときにこの拠点が発する情報はどういうふうにインディペンデンスを保つのかという課題を等閑視して、無邪気に情報発信できませんというのは全くそのとおりだと思いますね。どうしたらいいのかわからないけど。それをどうするつもりかというのには、つくる主体としては答えないといけないよね。というような理解でいいですか。

○志賀委員

そうです。あと、ハードをつくる時にかかる莫大なお金みたいなことを、インディペンデントなメディアの質を上げることに使うというか、だからラジオ的なことがあるとしたら、それを本当にクリアな透明のボックスのようなものが公園に置かれるのもいいし、とにかくそれは小さく小さくというような。

○本江副委員長

そのハードウェアはね。

○志賀委員

小さくささやかにというような、それは路上かもしれないし、公園かもしれないし、わからないですが。そして、そういうものが起こるようなという。

あと、そうなる時間を扱うことになるので、例えば震災があった時間を毎日何かの形で知らせるようなこともできると思うし、日常に戻していくというか、それがアラームのようなものではなくて、わからないけれども、美しい鐘の音じゃないけれども、そういうもので毎日毎日、「ああ、この音は」みたいなこともあり得るかなという。

○本江副委員長

なるほどね。ラジオという、もちろん本当にラジオをやるというのもあると思うけど、何かメディアの目玉というか比喻としてラジオ的なものと。

○志賀委員

そうですね。声。

○本江副委員長

声。はい、どうぞ。

○大泉委員

今の志賀さんのお話で、「ラジオ的な」は何に置きかえられるのかなと思いついて聞いていたんですけど、ちゃんと編集されたとか、こういう役割のこの番組だったり、こういう意味を持った音楽だったりということなのかなと。独立というのとはまた別のね、ちゃんと編集されたという意味なのかなと私は受け止めて今聞いていたんですけど、だとするとやっぱり今やっているのがある意味1つの編集会議なのかなと思うんですよね。我々は何を経験して、何を伝えて、この場所でのというのは、たぶん我々が今やっているのは、まだまだ細部まで落とし込めていないですけど、編集会議を、検討委員会ってそういうことなのかなと思っていて、今何に重きを置き、何の優先度は下げ、みたいなのを確かめているので、志賀さんのおっしゃっているのはたぶん我々の議論だったり、これからの議論をちゃんとすることが、たぶんラジオ的なものにちゃんと寄っていくのかなと、都合よく解釈してましたけど。

○本江副委員長

でも、編集するという言葉自体の中には方向性がないから、ラジオ的な小ささとか、比喩的な意味で弱さや小ささを指向していく編集もあるし、何かコンプラ編集部になって、ある権威的になっていくことに向けても編集することはできてしまうじゃないですか。だから、編集せねばならないのは同意だけど、それには方向性があるって、それはどうするかということが問われる。ラジオ的であるべしという時点でその方向が入っていますよね。だから、そうだそうだというわけでも必ずしもありませんが、こういう全体像をきちんと示す責任がありますということとはやや矛盾する態度でもあるので、そこをどう扱うのかみたいなことはたぶん議論していかないといけないところの一つに出てきている。だから、もう既に矛盾する、これどうすんのかなみたいな話がちょっとあるような気がしますね。はい、どうぞ。

○佐藤（泰）委員

原発のことに絡めて、これは私の個人的な感想ではあるけれども、福島で原発の問題が起きたときに、いろんな意見、いろんな情報が飛び交っていて、そのことを志賀さんはおっしゃっていると思うんですけども、あれって結局原発推進派の意見と反対派の意見がある意味、危険性があるとか危険性はないとか、そういうことにつながっていて、どの人のどういう意見を信頼すればいいか全然わからずに、その中で福島の人たちは置いてきぼりにされているとか、そこで東京の人たちが自分の党派性の中での主張を福島原発事故を利用して改めて主張し合うみたいなことがあったと思うんですよね。だから、実際こういう災害が起きたときに、何が真実なのかどうもはっきり見えてこないということがあって、原発はそういうふうに使われてしまった。もちろん原子力自体に対する技術的なバックボーンがそんなに強固なものじゃなかったということを我々はそのときに突きつけられて、あぜんとしていたということも事実ではありますがけれども、そういう誰かにとって不都合なことというのは、震災のときに常にあって、復興に向けてみんなで頑張ろうとかね、そういうすごく明るい前向きなことの一方で、言えないこととか言っちゃいけないこととか、あるいは政治的なことで言いたくないこととか、そういうことがいっぱいあったんですけど、記録するときにはそれがネグレクトされていく可能性がとても大きくて、何かきれいごとであったり、みんな頑張ったとか、お

疲れさままみたいなことばかりが伝えられていくと、本当にそこで何が起きたかということ、あの闇の中でどういう化け物がうごめいていたかみたいなことというのが本当に伝わらない。それをちゃんと伝えないといけない。それを伝えられる人は誰なのかということが、志賀さんの話としては一つラジオということであったんだと思うんです。もちろんラジオもそうだけれども、それを伝えていく、不都合なことであっても偏らずに伝えていくことに対しては、やっぱり信頼っていうのがすごく重要じゃないですか。信頼をどういうふうにつくるか、それは震災とか災害が起きてから信頼を得ようとしたって無理で、その前からその信頼は強固なものとして育てていなければいけないんですよ。それを育てていく作業がもしかすると、今例えば仙台が置かれているこの状況の中で、そういう不偏不党の信頼できる情報源というのをどういうふうにつくっていくのかとか、そのための情報のネットワークをどうやって事前に形成すべきなのかみたいなことが議論されて、それに向けて一步一步近づいていく作業が続いていくみたいなことが、仙台であればできるんじゃないか。もちろん仙台でなくてもできると思うけれども、仙台みたいな体力のあるところじゃないとできなくて、ちょっとした政治的な都合で押し流されてしまうようなところだととても無理だし、あるいは経済的なこと、自分たちの生活のためにはこれ黙っておくしかないとなってしまうと、それはやっぱりなかなか伝えられないとかということもあるので、そういう不都合なことをちゃんと伝えていくということ、それが未来の我々のためだということに対する確固たる信頼みたいなものをどうつくっていくかということ、今話を聞きながら、震災後取り組むべき課題として改めて重要なことだったんじゃないかなという気がしましたね。

○本江副委員長

それを引き受けることができるから仙台市でやるのだと。そんなこと言って大丈夫なのかっていう感じだけど。

○佐藤（泰）委員

でもそれがね、すごい課題だったと思うんですよ。何が本当なのみたいなことはいっぱいあったし、いまだに隠されていることはいっぱいある。言えないこともいっぱいあるという状況に対して、どう向き合っていくのか。その全てを解決できないにしても、そのことを常に、これは問題なんだよっていうことを発信し続けるだけでもすごく重要な意味があるかなという気がしますけどね。

○本江副委員長

はい。どうぞ。

○植田委員

今の佐藤さんのご発言にもちょっと関わらせてなんですけれども、小松理虔さんという福島の方が、「福島は福島宣言をもっと早くに出すべきだった」みたいなことを本の中に書いておられて、福島は今後もうこんなことはしませんとか、何かそういう方針のようなものを打ち出してほしかったというようなことをおっしゃっていたんですね。それで、仙台ならではというところで、例えば広島市とか長崎市でこれは人災なんですけれども、うちはこういう自治体であるみたいなことをずっと伝えてこられて、もう生存者

の方、経験された方というのが少なくなっているわけなんですけれども、本当にこういう人災が二度と起こらないようにうちはしますという、そのためのことをやっていきますみたいな宣言をされてきた自治体だと思うんですね。もちろん戦争ですから、自然災害とは少し違っているわけなんですけれども、それを考えたときに、例えば東京とかも東京大空襲があって、3月10日に10万人近くの方が亡くなったと言われていたんですけども、それに比べると東京都ってちょっと情けないなというか、ずいぶん災害文化というか、戦争も災いというふうに考えたら、ちょっと情けない自治体だなというふうにも見えてしまうんですね。仙台市も、封筒にも書いてあるんですけども「防災環境都市・仙台」というふうにうたっていて、この「防災環境都市・仙台」っていうのをずっとうたい続けるとしたら、それは何なのかなっていう。ただ単に防災グッズがたくさんあふれていて、何かのときにはこういう組織の編成になりますとかすごくきちんとしているというふうな、それ以上にもっと何か、ずっと連綿と続けていく、伝えていくというふうなスケールで考えたときに、志賀さんの写真展を拝見して本当に私思わされたのが、「本当は生身の人間なんだ、結局」っていうか、仙台市でも本当に排泄とか飲み水とか、あと寒かったのが燃料とか、本当にそういうベーシックなものをどうやってかき集めてみんなに渡すかというか、そこってすごく課題になったと思うんですね。ですから、廃棄物処理とか下水処理とか沿岸にそういうものを押し付けているじゃないですけども置いているという構造というのは、都市として割と全国共通にあると思うんですけども、そういう意味で仙台市って被災地と別のものでは全然ないですし、もちろん沿岸部もあればこういう都市部みたいなのところもあるのが仙台市ですし、そういう意味ではもっと、防災環境都市なんですけれども何かもっと防災文化じゃなくて災害文化というか、すごいラディカルに、うちはこういう都市ですっていうか、私は足るを知るようなというか、原発なんかつくったっていざ津波が来たらこんなになっちゃうんだよというか、それを本当に隣で見てきているわけですよ。だからすごくラディカルに、うちはこういう文化を持っていく都市をつくっていきますみたいなことができるような方向性というか、何か共有できないかなというふうに思っていたんですけども。

○本江副委員長

ありがとうございます。防災環境都市と名乗っており、災害文化というキーワードはこれまでの議論の中でも出てきて、仙台市は被災地として災害文化を育てて、それを持った都市を自認していくのだ、それでそういう都市の未来像を持つのだといったときに、今おっしゃったように人数分ヘルメットがありますとか、水が余計に備蓄してありますみたいなことだけだと、それもせいぜい防災文化でしょうと。それだけじゃなくて、災害のときに何が不安で何が危機的であったのかみたいなことへの冷静な反省もあり、例えばその情報の共有のされ方とか、それは信頼できるのかみたいなことが揺らぐんだみたいなことについても我々は経験をしていて、その危うさをちゃんと知っているから、あるインディペンデンスをどう保つかということが本質的に重要なことであって、それが揺らぐと災害が大きくなってしまおうかという、何かもうかなり抽象度が高いですけども、でもそこに被害が起こるといふか、みんなの信頼に被害に起きるといふか、被災するといふか、そういうようなことも含めて扱うのだというのは結構大事で、仙台が災害都市宣言をして、災害に対抗する文化を持った都市であると言うときには、そうした単純な防災対応がありますということだけではない、実際に被災してしまって、想定し

ていなかったことがいっぱい起こる中で乗り切ってきたから、言わねばならないことをちゃんとと言うみたいなことですね、そういうことはやるべきでしょうね。災害文化って軽く言っていたけど、結構重い話で、インディペンデンスとか、トラストみたいなことがこの中に込められると思うと、軽々しく口にできないという感じもします。でもそれをもっと大きい主語で言うのはだんだん嘘っぽくなっちゃうけど、仙台って100万人ぐらいだったら顔を見合わせながらやれますよねって言うっていう感じですかね。あんまり司会が言い過ぎるといけない。はい、翔輔さん。

○佐藤（翔）委員

今の植田委員のことに付け足して、災害文化、私たちの分野での文脈だと、やっぱり「地方にあるもの」なんですよ。都市部じゃなくて。どっちかという。例えば宮城県内の典型例ですけど、内陸・鳴瀬川のほうの古民家を見ると内陸だけでも船があると。内陸の家なんだけど、船がかかっているんですね。みちのく湖畔公園に行くと古民家がいっぱい並んでいますけど、避難船ってことで、川が破堤して浸水することを前提とする暮らしになっている。それは決して防災じゃなくて、災害と共存している世界のことを災害文化と我々はよく言うんですけども、それを仙台が言うことはとても意味があるなと思っていました。要は、都市化されて災害文化に逆行しているけれども、災害文化にチャレンジするというのはとってもインパクトのある宣言だなと今聞いていて思いました。

○本江副委員長

なるほど。ありがとうございます。普通は矛盾するけれど、それを飲み込んで災害文化を持つ都市になろうということだ。ありがとうございます。もう結構調子よくしゃべっているからもうそんなに時間ないです。まだ話していないこと、文脈をちょっと変えてもいいですので、あればどうでしょうか。では大泉さん。

○大泉委員

進め方にも関わるんですけど、今回の議論の中で世界防災フォーラムがあったり、我々もそういうところで関わっていきこうという中で、ちょっと私気になっていたのが今年広島原爆資料館の展示が入れ替わって、私まだ行ってないですけど、今回おどろおどろしいジオラマ的なものではなくて、個々の被災したものを意味展示の肝に据えたという。何が言いたいかというと、あそこの館長さんは展示が変わるときに結構多くのメディアに出ていらっちゃって、たぶんいろんなものを伝えなくちゃいけない、目配りをいっぱいしなくちゃいけない中で、結果そこにたどり着いたという背景というか知見というか、人災と自然災害の違いはあれど、74年経って経験者が減っていく中で、「ここに僕たちは伝えていく力を見出した」という話は、我々学んでもいいのではないのかなと。そういったある意味でたぶんいろんな苦渋の決断でしてきたと思うんですけど、その苦渋を背負った人が東日本大震災を我々がどう今伝えなくちゃいけないか悩んでいるんだと知ったときに、何を言ってくれるんだろうなというのはちょっと知りたいなという気はするんです。なので、進め方の中で館長さんとか展示の更新に携わった人の声に触れてみたいというのはちょっとありました。

○本江副委員長

ありがとうございます。ほか、いかがでしょうか。

○野家委員長

さっき佐藤さんの、伝承でもプラスの面とマイナスの面を両方きちんと伝えなければいけないということで、確かに震災直後は東北人の我慢強さというのが世界中に評価されたり。ただ、震災直後は災害ユートピアということで、昔の近所付き合いが復活したりというようなことが、だんだん復興が進むにつれて堤防の高さをどのぐらいにするということから始まり、あるいは大川小学校の場合には裁判にまでなりましたし、利害とか、あるいは観点の対立とか、そういうことがあらわになってきているわけですね。だから、絆とか連帯とかそういうプラスの面と、今の利害の対立とかそういうマイナスの面というか、それをちゃんと両方とも伝えていかないと、災害文化っていうのは伝承されていかないというところがある。ただ、利害が対立する面をどう展示とかに反映させるかってなかなか難しいところでもあるんですけども、そういう正負両面の伝承をきちんとやる場所になっていかなければならないと思いますね。

○本江副委員長

そうですね。役割としてはそういうことをしなくちゃいけなくて、だんだんそうなるというか、災害ユートピア状態のときに構想される展示とは明らかに違うものとして、派生することの全体像というのはそういう意味でもあって、それがわかるみたいなことです。となるとですね、どんどんわかりにくい施設になっていくんですね。前回大泉さんがおっしゃっていたエンターテインメント性というか、あえて言うと来場者の期待というか、変なことだけど災害が大変だったとか、わあ～と思いたいみたいなことを思っただけで、何か難しいことがいっぱい書いてあって、いいこともあれば悪いこともあるみたいになっていると、どう受け止めていいやらとなるじゃないですか、施設としては。どうしたらいいですか。はい。

○遠藤委員

さっき言葉としても矛盾という言葉が出ていたと思うんですけども、私は矛盾を大切にするとか、矛盾を引き受ける場所になればいいんじゃないかなと思うんですね。今、いろんなことが混沌としていて、矛盾があるのが当たり前だっているように捉えている人も増えて、きっぱり物事に線を引きけるものだけではないということが、日常生活の中でも何となくそんな雰囲気もありますし、災害となるとさっき皆さんがおっしゃったようないろんな視点と経験によって真実が、その人ごとの真実がたくさんあるわけなので、これは使ってこれは使わないっていうこと自体が何か見誤るような感じがちょっとするかなという感じがしました。なので、分け過ぎるとか整理し過ぎるということへの心配というのがちょっとあります。施設の中で何か伝えるということは、期間、時代、時代の雰囲気とか伝えた方ががあるので、だからこそ展示替えとかキュレーションというのが発生すると思うので、同じ展示をずっと続けるわけじゃないでしょうから、そういう意味ではその時代、期間ごとで思い切ったキュレーションを試していったりというのはあるんじゃないかなというふうに感じています。

あと、ちょっと視点は変わるんですけども、仙台の拠点性から全体像も知れたほう

がいいんじゃないか、あといろんな関わりが仙台だからこそあるという点。そしてその反対側にある、仙台市の市民が味わったいろんな被災した苦しみとか、あと土砂崩れが起こって住めなくなった方がおられる。そういったところの支援を通じて私が思うのは、隠しておきたいというよりは、ほかでもっと大変な人がいるから何か声高に言っちゃいけないんじゃないかという、そんな気持ちもあって言いにくい。記念になる日には被害が大きかったところを先に取材してもらってという気持ちもあると思うんですね。そうすると、仙台で身近なストーリーがどんどん隠れやすくなって、言えないような状況になっているものがたくさんあるように私は感じています。だからこそ、仙台市の施設でもあるからこそ、市のミクロ的な部分もきちんと表現をするということはとても大事なんじゃないかなと思いました。

○本江副委員長

なんかね、声高に言いにくいというか、隠しちゃうというか、そういうことはありますよね。「私も被害はあったけど、ほかの方に比べれば全然何でもないです」みたいな態度というのは至るところにあったように思いますね。それをちゃんと拾っておかないといけないだろうと。それはさっき僕が言った十字架を押し付けるというのと裏返しで、同じことだと思いますけど、そういうことをちゃんと引き受けなきゃいけないというようなことです。

さっきも言った、これもまさにそのとおりでと思いますが、わかりにくくなるというか、「何だかなあ」ということにならないかなあとも思います。1つのプログラムの企画会議だとすると、やらなきゃいけないことを盛り込めば盛り込むほど、それは正しいけれども、それでいいのかみたいなことになる。普通はここで、まあいろいろあるけどここだ！みたいに旗色を鮮明にして、仙台市としてのステートメントはこうだと言うのが普通です。だけど、「いや、それはしないのだ」みたいなことならそれはそういう旗だということなんだけど、まさに我々は何をするためにこれをつくっているんですかということそのものですけど、今の議論は。「いいの？こんないろんなことを言う、しかもラジオ的な小声でみんなが言っている」みたいな。どの声を聞けばいいのやらみたいにならないの。

○佐藤（泰）委員

この間、星空みたいになっていうことをちょっと例えて言ったんですけども、要するに本当にいろんなことがあった。本当に細かなこと、個人的なことから、別に人に言う必要もないと思われること、ものすごく大きなことまでいろいろあって、それらをすべてひっくるめたものがあのときの経験というものの全体像だと思うんですね。今、全体を見渡すことができないというお話があったと思うし、それを何とかして見渡すことができるようになったら確かにすっきりというのかな、そういう場所が必要だなと思うけれども、一方で、すべては見渡せないという事実というか現実をどういうふうに見せることができるかということもあるかもしれない。例えばですけど、空間のなかに雲のような大きくモコモコとした感じのものがあって、よく見るとそれは無数の星空のように1個1個がピンのような小さな点で構成されていて、それらが紐か何かでつながっていて、その雲の中に入り込んでどれかに触ると紐づけられたどれかの情報が伝わってくる。それがどういう関係があるのかなんていうのは、その隣、隣とやっけていくと何かつ

ながらで見えてきたりする場合もあるし。だけどそれはもう全体の中の本当にごく一部の事なんだなということは何となく感じつつ、小さいけどとてもリアリティのあるなにかに触れることを経験できると。もしかしたらあ那时的体験をもう一回伝えることに近いのかなという気もしなくもないですね。仮に全部の情報が示されたら、それは膨大すぎて結局誰も見られないですよ。むしろ全体は膨大な質量をもつ情報として存在を感じることはできるけれども、情報そのものはそこにはなくて、見る人がそこに働きかけることによって何か答えてくれるというようなもの。具体的にじゃあどうすんのって話なんですけど、まさにイメージとしてそういうこともあり得るかも、そのことを考えていくことによって何か答えが見つかる可能性もあるかもしれないなど。そもそもそういうことが必要かどうかということも十分議論しなければいけないと思いますけどね。

○本江副委員長

そうですね。

○佐藤（翔）委員

今までの話で、あと佐藤委員の言い方を変えるというか、かもしれないですけど、ちょっとずるいんですけど、本江委員が言ったわかりやすさ、あと皆さんが今展開しているわかりにくさを何とか共存できないかというところですよ。わかりやすさとわかりにくさのハイブリッド表現を目指したいと。いつもずるいこと言いますけど。

○本江副委員長

そうですね。そんな要綱だとプロポーザルに誰も応募してくれないってことになりそうですが、まあそれは冗談ですけども。どうでしょう。はい、志賀さん。

○志賀委員

複雑さということだと思んですけど、その複雑性を伝えるかということに、やっぱり施設の仕組みとかということではなくて、拠点としての、本当にいろいろなことから独立して、東日本大震災というものに特化したメディアをつくるにはどうしたらいいのかということをやっぱり集中して考えるというふうなことが本当に大事で。となると、どういうプログラムかは置いておいて、やっぱり複雑さというものについてのプログラムという、それについてたくさん議論が行われて、そこで編集されたということを今すごく考えていたんですけど、編集されて都合よくなるか、わかりやすくなるか、そういうことよりももう少し個人の被災レベルの差に沿った言葉とかそういうものの選び方というのを詰めていく。だから本当に学びがすごく必要になってくるような気がするんで、複雑さをどうその中に入れられるかということはあると思いますけど。

信頼を得ていかなければいけないというのは、本当に大問題だと思っています。というのは、市民として、もしくは遠いからなかなか仙台に来られないけれども、ここの発するメディアはどこからも影響されず、本人たちがいろいろな複雑なことを複雑なままに発信しているんだという信頼をどう得ていくのかというのは、複雑さのレイヤーみたいなものを学ぶ必要がある。

○本江副委員長

うん、わかります。複雑さをちゃんと引き受けていないと信頼してもらえないですよ。わかりやすくシンプルにすると、支持を得られるけどみんなから信頼してもらうことはできないみたいなことがあるかなと思います。

施設のプログラムの企画会議としては、ほとんど破綻しているというか、こんなつくりたくないみたいな感じですが、でも震災をちゃんと引き受けて、未来に渡すためのメモリアル施設をつくっているというときに、そんなに不用意な旗色を鮮明にしているのかということはあるので、ちゃんとやらなくちゃいけないなということをやっているということのようにも思います。まだたくさん付箋が手元に残ってらっしゃる方、いろんなレベルで話があっているの、おいしいコーヒーがなきゃダメだみたいな話もこの間もありましたけど、おみやげを売ろうとか、そんなのもちゃんと出てきたほうがいいです。

○大泉委員

複雑さとか不都合なこと、矛盾もちゃんと引き受ける、それが信頼につながるというのは、私もそのとおりでと思います。でも、一方で訪れる人への便利さとか、安っぽいですけどね、その期待はどこにあるんだろうっていうのを複雑なまま複雑に提供されたときの人の、それって丸投げかもしれないし、もしかしたら引き受けられないという結論で、そうしたらそれはこの地に暮らす一人一人にあなたが聞いてくださいと、それが全てですという話になっちゃって、役割放棄みたいな感じもしないでもないですよ。なので、そうやってきたときにじゃあ全部をわかりやすくしましょうというのも安っぽいので、逆に言うともう、私はまたざっくり言うと複雑さみたいなものをどの程度許容するかみたいな、どこまでだったら訪れた人が許せて、我々が言っていることが嘘じゃないよねとか、まとめ過ぎじゃないよねとか、何かそういうところにどこかでやっていかないと、メモリアルの拠点施設なるものはやっぱり持たないの、個別な事例だけをあなたが信頼する人にじかに聞いてください、それこそが、その積み重ねこそが全体の複雑さですみたいな。そこを希求しちゃうと、やらないほうが誠実だっていう話になりかねないかなという気もするんですね。

○本江副委員長

なるほど。じゃあ、植田先生。

○植田委員

複雑なものを複雑なままというふうなところで、私はシンプルに、もう既にいろんな業界の方がいろんな記録誌とかをつくっておられて、いろんな人の会話レベルの、声のようなものがよく聞こえてくるようなものがあって。私は沖縄県の沖縄公文書館というところによく行くんですけども、そこは本当に1つの言葉を入れたらいろんな検索がすごくたくさん上がってきてくれて、英文の文書から個人が起草したようなものまで上がってきて、どうぞいくらでも調べてくださいというふうな姿勢をすごい感じるというか。これは本当にお金とかマンパワーもかかることになってしまいうんですけど、でも時間がかかってもそういういろんなものがアーカイブとしてつくられていて、見ることができるというか。さっき野家先生がおっしゃったような負の側面というか、本当はこうだったのにこうできなかったとか、そういうところは本当にむしろ雄弁に伝えていくべきところかなと。そこが複雑性をそのままそぎ落とさないでというところにもなるのか

なというふうにも思ったんですけれども。

○本江副委員長

中心部の施設でアーカイブみたいにしますみたいに言っているのは、ある複雑さを保つ公文書館の目玉はそれでいいと思います。まさにそういういろんな人がいろんなことがあったというのがちゃんと集まっていて、ふさわしく取り出せる、あるいは能動的に取り出してくれる人にはちゃんと提供できるようになっているし、みんながそうじゃないから、そういう人にはさっきの時代に応じたキュレーションみたいなことで、こういう見え方もあるとか、こういう見え方もあったとかというのを順次つくりながら進むみたいなことはある。複雑さを丸ごと理解してくれというのは、だって原理的に無理だから、そうじゃなくて、見えているけどこれはあくまで一面であって、その向こうにもっと複雑な、誰にも全体像は理解し得ないけれども、そういうものとしてあるというようなことを見せて、理解してもらって、構造を理解してもらいつつ、部分的なことについては十分に理解していくみたいなことは、実はそんなに原理的に矛盾することではないのかもしれないですね。野家先生。

○野家委員長

今植田さんがおっしゃったのは全くそのとおりでと思うんですが、まとめにも書いてあるように東日本大震災の経験とは何があって、「人知を超えた巨大な出来事であり、全てはわかり合えない。その「わからなさ」をどのように引き受け、伝えていけるかがすごく重要」と、今本江さんおっしゃったように。だから、施設を考える我々の中にも、あるいは市民の方々の中にも、東日本大震災全体を単純なストーリーでまとめることは誰にもできないと思うんですね。だから、当然そこには揺らぎがあるし、ブレも出てくるし、揺らぎやブレを恐れずに引き受けていくというか。さっき広島原爆資料館の展示替えの話が出ましたけれども、やっぱり何十年か経てばその視点からもういっぺん見直す、修正するということが当然起こり得るわけで、だから試行錯誤を恐れずに計画を立てて、トライアル・アンド・エラーに加えて、トライアル・アンド・エラー・エリミネーションということを行った人がいて、つまり進行するにつれて間違ったところは修正しながらまたつくり直していけばいいというか、そういう態度を、あまり最初からちっとまとめた単純なストーリーにまとめ上げないほうがいいと。そこに矛盾のまま書いてありますけれども、だから絶えず現在進行形であることをむしろ知覚させるような施設でありたいなと思っています。

○本江副委員長

ありがとうございます。どうですか。じゃあ志賀さん。

○志賀委員

複雑さということ考えたときに、それを認めるということがある意味丸投げ、じゃあ個人個人でみたいな話にならないためには、やっぱり複雑さを拠点が受け入れて、そのわからなさ、揺らぎ、ブレというのを何度も問いかけるということ諦めないでずっとやるというその姿勢みたいなことが大事で、となるとやっぱり中にいる誰かというか、誰の顔なのか、誰がそこにいるのかということが本当に大事になってくるなというふう

に思います。

○本江副委員長

今の中に誰がいるのかという話は、本当に個人のレベルでもあるし、ちょっとまた話を戻す感じになるけど、それを仙台がやっているということはどうかという見え方もありますよね。日本国がやるのでも県でもなく、仙台市がそれを持つのだということがはっきりと言えると、やらなきゃなっていることが言える。

○志賀委員

そうですね。だから、仙台市の中に独立したインディペンデントなメディアというのがどうやったら立ち上げられるのかというのは本当に大切なところだと思うし、その希望が少しあるということが、体力がある市ができることだと本当に思うし、そこが何かからもインディペンデントになるにはどうしたらいいか、インディペンデントで立ち上がっている人たちがどのようにあるのかということは命綱な気がします。

○本江副委員長

ありがとうございます。どうでしょうか。はい。

○佐藤（泰）委員

そのインディペンデントな状態をしっかりと保ち続けるための土台としての、それを支えている個々の記録とか情報とか、そういうものをどうつくっていくかというのはすごく重要で、信頼のおける形でどう発信するかということも必要だけれども、そのもとになる情報がいかに不偏不倒の状態を維持し、

その姿勢を貫いて収集・保管され、公開されているかということがすごく必要だと思っています。アーカイブって言うけれども、単に過去のことを記録するというのではなくて、未来の信頼に向けた土台として必要なアーカイブなんだというような、そのような考え方にちょっと見方を変えてみる必要もあるかなと思うんですね。そういう意味で、信頼がおけて、今後いろんな意味で未来の私たちを支える情報のアーカイブというのをじゃあどうやってつくれるのかということは、この委員会の限界を超えたかなり技術的な検討が必要になると思うんですね。これは進め方の話にもなると思うけれども、技術的に早く検討を始めないと、できないことをいくら言ってもしようがないし、何だったらできるのかとか、できるためにはどういう準備が必要なのかとか、どういう作業が必要なのか、どういう人材が必要なのかということを実際に早目に検討を始めていく必要があるんじゃないかなとは思っているんですね。

○本江副委員長

ありがとうございます。調子よくしゃべっているので、そんなにもう時間がないです。いろんなレベルがあっというので、考えてこられたことをお話してください。今までの話はずっと重要な話だったけど。はい、どうぞ。

○佐藤（翔）委員

仙台がやるのはなぜか、あと仙台がやるということは仙台の市民税を使ってなぜやる

かというところですけど、そういった意味ではその恩恵が市民になればいけないというのはあると思います。それで、前回も前々回も出ていますけれども、想定外となかなか言いたくないですけれども、それを超えるものが災害だったとすると、事前に想定していたハードでは無理だと。そうしたら、やっぱり人間が持っている能力で対応しなければいけないというのは、おのずと出てくる答えといいますかね。これは研究の話になって恐縮なんですけれども、本学のほうで複数の先生方と一緒に、この震災をうまく乗り越えた人ってどんな人なんだろうという研究をやったんですね。そのときに、うまく乗り越えた人は8つの力があつたと。8つ全部説明すると1時間経っちゃうんでやめるんですけど、例えば単純なのはリーダーシップがあるとか、あとメンタルをコントロールできるとか、誰でも想像できるやつだったんですけど、ちょっとおもしろいなと思ったのが、いかに他人を愛しているか、愛他性ですね。あと、いかに自ら健康的であろうとするか。人間は体が基本ですので。あと、ある程度頑固じゃなきゃいけないとか。そういうことって決して災害特有の能力ではなくて、危機的な状況をクリアするための能力で、かつリーダーとか、問題解決とか、そういう前面的に出てきたものじゃなくて、人間のそもそもの能力も重要でした。それを私たちは災害時の8つの生きる力というふうに名前を付けたんですけど、さっきの市民への恩恵、市民へ提供されるものというところに戻すと、災害は人の理解を超えると。ハードで対応できるかというところとできない、人間の能力で超えないといけないとすると、やっぱり震災が起きたことをきっかけにするのであれば、そういう能力が身に付く拠点というのが単純な方程式なのかと思って、今日はお話いたしました。

○本江副委員長

こういうことが身に付くのだと。仙台市民は皆、これを身に付けている、あるいは付けたいと思っている。だから災害を克服できる。

○佐藤（翔）委員

そうすると、実は災害以外でもメリットがあるなということで、余計ベネフィットが大きいかなと思いました。

○本江副委員長

ありがとうございます。ほかはいかがでしょうか。はい、どうぞ。

○志賀委員

外の、例えば海外の人から見たときに、この取り組みというのが非常にユニークな取り組みであるというような、そういう魅力のあるものであるといいなというふうに思いますね。インディペンデントな何かを仙台市の中に立ち上げるとか、非常にユニークなことだと思うし、そういうような本当にほかに例を見ないようなことをどうやったらできるのか、そのユニークさみたいなものを大事にしたいと思うんですけども。

○本江副委員長

その具体化していく中で、これはユニークなのかということを問いながらやるということですね。今のことをちょっと引っかけて言うと、ある種の防災メモリアル施設のい

くつかのステレオタイプはあるから、その東北版を仙台にもう1個つくりますみたいなのだとユニークではないので、でもこんな議論を延々やっていて、複雑さを引き受けるとか言い出している時点でちょっと狂ってると思いますけど、いい意味でね。ちゃんとやれば結構真摯にユニークなメモリアル施設になり得るんじゃないかと思います。はい、遠藤さん。

○遠藤委員

記録の白スペースを埋めてみようかなということで発言をするんですけども、1枚目の「②市民力のまち」の隣が真っ白なんです。

○本江副委員長

そう。言ってみただけどどうしていいかわからないという意味です。

○遠藤委員

私は常々この「市民力のまち」っていう、市民がいろんなアクションを起こしてきたということが、みんなそうは思っているんだけど、それはすごく魅力で、それは実は商品になるんじゃないかと思っているんですね。いわゆる今インバウンドとかいろんな取り組みでも、歴史とか自然の体験とかというものはありますけれども、市民力のいろんなアクション、行動自体がすごく魅力的で、仙台にしかないものであって、それが先ほどのユニークさにもつながるんじゃないかと。ただ、それが実はなかなか記録が残っていかなかったり、どこに行けばあるのかわからなかったり、会いたくても会えるすべがなかったりということで、つなぎ手がすごく不足しているんじゃないかなと思うんですね。例えば世界各地で地域の課題解決をしていくときのつなぎ手や場としてフューチャーセンターというのがあると思うんですけども、ある意味防災とか、今回私たちが議論していることをきちんとつないでいけるような機能とか人がちゃんとそこにいるということがとても大事だなと。それがキュレーションにもつながったり、ユニークさにもつながったりということで、前回も人を早く育てたいと泰さんがおっしゃっていましたが、そこともすごくつながってくるのかなと。やっぱり生きてる人はもうまさに固有の人なので、その人がありありと魅力とかユニークさとかというのを語ってくれる、でも今はつなぎ手がないというところを、うまく早目早目に何か手当てしながらも育てていくとかということも必要かなと思いました。

○本江副委員長

ありがとうございます。もうすぐに着手しないとみたいな話にも関わるところですね。はい、野家先生。

○野家委員長

さっきから問題になっている、なぜ仙台がやらなきゃならないかということを考えなければならぬとは思いますが、これは英語で言うと The Great East Japan Disaster じゃないですか。やっぱり海外の人は East Japan というふうに捉えていますので、被災3県だけでなく千葉県とかそっちのほうまで被害は広がっているので、やっぱり East Japan がどういう経験したのかということをもとめるとしたら、一つは地

の利ということで仙台が真ん中にあるということと、あとは人口規模とか予算規模からしても、ほかのところはそれぞれの村や町、県でやるとしても、東日本全体を見渡して何かそういうメモリアルなものをつくるとすれば、やっぱり仙台しかないというのが一般的な見方というか、だからそれだけ仙台には責任があるんじゃないですか。やる責任というか、期待に応える責任があるんじゃないかと思って。だから仙台がここで何もやらなかったら、仙台は何をやっているんだと、10年経っても何も手付かずじゃないかというような批判を受けると思いますね。だから、仙台が持っている地理的な位置と、それからさっき二重性と言ったのは被災者である、そういうポジションに立っている、そういうところから東日本全体を見渡してこの震災なり原発事故を含めて、何があったかというのを日本に、あるいは国際的にも提示する責任とか必要があるんじゃないかと、そういう観点から考えるべきだと思っています。

○本江副委員長

もうけっこう時間なんだけれども、今日は、非常に重要な議論がいっぱいあったと思います。今後のスケジュール感のことで言えば、これでもうちょっと整理をして、まだもちろん内に矛盾をはらんだ言葉遣いになっていたりはあるが少なくともこういうことが重要で、こういうあり方のものとして拠点をつくっていくことを市が引き受けて、やろうと思うけどどう思う？というのを市民向けに、要は公開の議論ですから、皆さんに報道もされてはいるけれども、よいお披露目をして、少なくとも3回延々議論をして、こんなことが重要だと思っていますということが市の名において公開されることになって、ふさわしい批判と議論がもうちょっと広範に始まる。そのための今日は準備会なのですが、もちろん少し時間があって整理をした上で提示されるとはいえ、前回までの議論と我々の今日の話と組み合わせたところである、言っているところに来ているかどうか、もうこれで皆さんにお示しして大丈夫ですかね。こういう話が漏れていないかとか、こんなぼやっとしたこと言ったってみんな困るんじゃないかみたいなこととかの、言い方がちょっと違うかもしれないけど、もうみんなと話し始めて大丈夫でしょうか。今は、こういう議論に割と慣れた人たちとしてやっていますから、何かできるような気がしていますが、こういう議論をオープンにするってそれなりに恐れながらやらないと危ないので、大丈夫でしょうかというのを最後に確認しないと閉じられないんです。このままだとこれ（資料1「第1回・第2回検討委員会の意見整理」）に書き込んだやつが出ちゃうよ。で、俺たち責任者だからね、大丈夫ですか。どうでしょう。

○植田委員

すみません、今言うなって感じなんですけれども、恐らくオーディエンスの方から来るだろうと思うのは、何かつくるのかつくらないのかということかと。今まではつくるか否かはさておいて、お話をしてきたと思うんですけれども、皆さんどう思っているのかなと思っていて、そこは共有しておきたいかなと思ったんですけれども、私は何もつくらないよりは何かつくったほうがいいと思うんですね。

○本江副委員長

つくるって、何か建物をつくるのかそういう意味？つくるってどういうこと？拠点を整備するっていう言い方で、それが何のことかわからないまま、あえて宙吊りにして、

ずっと話しているんです。

○植田委員

そうですね。私がイメージしていたのは、まずアーカイブっていう本当に機能的なものもありつつ、何かもう少しメッセージ性が広がりを持っているような、メモリアルのような、何というか、モニュメントのようなものを兼ねるような、だけど人が出入りできるというか、災害のことを考えるだけの場所でもないようなものをちょっとイメージしていたんですけども。

○本江副委員長

という投げかけですが、どうですか。

○野家委員長

あんまり話をまとめすぎてもあれかなと思って今まで言わなかったんですが、今植田さんは非常にいい提案をしてくださったと思います。だから、3回の議論を通じてある方向性は見えてきたんじゃないかと思うんですけど、一つはやっぱり追悼ということは外せないんじゃないかと。あれだけの犠牲が出て、いまだに2,500人が行方不明のままというんですから、そして毎年3.11が巡ってくれば、我々はそれなりの追悼の気持ちになりますし、マスコミ、テレビ、ラジオ、新聞はそういう特集を組むということですから、やっぱり追悼という、そしてこれを具体化するとすればやっぱり何らかのモニュメントみたいなもの、それがどんなデザインになるかとかは別として必要であると。追悼のよりどころになるようなものですね。

それから、2番目が記憶。これは今言われたアーカイブとか、あるいは語り部による記憶の伝承とかそういうもので、放っておけばどんどん風化してしまうし、記憶は当然失われますので、そういう記憶を定着させるというか、固定化するとまでは言わないまでも、それを次の世代に渡していく、そういう意味から言えばやっぱり何か建物めいたもの、そういうアーカイブとか展示とかをできるようなものが必要だろうとは思っています。

3番目は、発信の拠点ということです。追悼は現在、記憶は過去、発信は未来というふうに考えると、ここでは例えば子供たちに防災教育をすとか、あるいは今日も出てきましたけれども災害文化というものを形成すとか、そういう拠点になり得る、それは広場であってもいいし、あるいは何かイベント会場みたいなものでもいいし、だから現在、過去、未来にわたって3つぐらいのポイントがあるとすれば、仙台が予算を使ってやるにふさわしいような施設の姿が見えてくるんじゃないかなとちょっと考えています。

○本江副委員長

何かこの役割を果たすようなものを用意をすると、結局はつくることになるのではないかということですかね。先生の投げかけは重要なことだと思いますけれども、答え方がいろいろあると思うんですけども、どうですか。

○佐藤（泰）委員

最初の会議の時に、何をしたいのかということをもっと考えるべきで、何をすることが決

まったらそれに何が必要か、そのために人が必要とか場所が必要とかということが出てくると思うんだけど、今までの話の中で施設が必要という答えはまだ自分の中にはないと思っているんですね。施設がなくてもできることはいっぱいある。その前にむしろ人がいないと進んでいけないことが多いと思っているので、そっちのほうがとても大きな課題だなと。特に人をあらかじめ準備するとか、その組織を立ち上げるというのは、施設もないのに何やるのみたいな議論になってしまうので、役所だとすごく難しいことなんですね。だけど、今回はそれをやりながら、その人たちを中心にしてどんな場所が必要なのかということと一緒に考えていくくらいじゃないと、本当に生きる場所というのはつくれないんじゃないかなと思うんですね。必要に応じたものはできないんじゃないかなと思うんですよ。何かよくわからないけどとりあえずその場所をつくりましょうということになると、そういうものしかできない気がするし、それを超えていくためには一緒に支えて考えながらつくっていく人たちの存在が絶対に必要だと思うんですね。むしろ今はそのことを最優先してほしいというふうに思います。その結果として、施設だとか、モニュメントだとか、何がどう必要かというのは自然と導かれていくものなのかと思うんですね。今の段階でどっちだと、言ってほしい人もいるかもしれないけれども、それはまだ言うべきじゃないんじゃないかというふうには個人的には思っています。

○本江副委員長

ありがとうございます。どうでしょう。はい。

○佐藤（翔）委員

施設寄りの話もあり、どっちはわからないと。今回の中心という言葉と拠点という言葉で、物理的な中心施設という言葉もあれば、行いとして執心させる、集める。

○本江副委員長

求心力を持った活動。

○佐藤（翔）委員

それで、そのあり方としては、やっぱり私大事にしてもらいたいと思うのは、市民行事だというふうに考えています。仙台には仙台防災未来フォーラムという全国でも類を見ないイベントがあるんですけど、正直申し上げますと市民行事にはなっていないと。どっちかという外のお客さんがまあまあ多いかなという感じがするんです。

○本江副委員長

今は業界の行事ですね。

○佐藤（翔）委員

そうですね。業界の行事ですね。なので、施設と市民行事が大事だと思っていて、その中に仙台防災未来フォーラムとの関係、もちろん一緒だと思うんですけど、既存のそういったフォーラムのもとの関係性と、あとやっぱり私が短い期間ですけど生きてきた中で思い出に残っていることって、自分の住んでいるところのまちの小学校がみんな集まったイベントみたいな、何か音楽祭とか、全部の小学校が関わるということも大事な

のかなというふうに思っていました。

○本江副委員長

ありがとうございます。このまま何もしないということはないので、仙台市はやらなきゃいけないことがあるので、やる。そして、やる組織なり人をちゃんと手当てをするところ、施設はまあ要るだろう、そんなには要らないんじゃないか、ちっちゃいのでいいんじゃないとか、この規模感とかもまだまだ議論の余地がいっぱいある。何かそこに市民を入れた行事みたいなことで、例えばこういうことをすることにしますということを書いていくみたいな、あり方の議論だから、こういうことがあるということを書いていう感じでいいですかね。もう結構時間なんですけど、何か文脈ぶちぎってもいいので、まだもうちょっと言いたいことがあれば。

○野家委員長

どっちかという施設寄りの発言をしてしまったのですが、佐藤さんが言われたように箱ものをつくって終わりでは意味がないので、施設をつくるにしてもそれを運営して育て、引き継いでいく人づくりとタイアップして、ハードとソフトがきちんとかみ合っただけで進んでいかないと、建物をつくって終わりになってしまうので、その辺を今後の議論の中では少しテーマにして議論していかないと、やっぱり実現した段階で市民を巻き込んだ活動になっていかない気がしますね。

○本江副委員長

ありがとうございます。補助金を取って単年度予算で何かやるみたいなこととは、かけ離れたことを今やろうぜって言うてる感じで、なかなか大変かとも思いますが、でもそういうことが大事で、そういうあり方でやるべきであると。はい、どうぞ。志賀さん。

○志賀委員

個人的なあれになっちゃうんですけど、過去、現在、未来の追悼っていうのと、記憶、過去というのは重ねられるかなというふうに思っていて、本当に個人的なあれですけども、音を使う。例えば毎日地震が起きた時間に鐘が鳴るではないですけど、それを子供たちが毎日聞くとか、それが何の音なのかというようなことを毎日意識することで日常化して、巣立ったときにも仙台では音が鳴っていたんだけどみたいなことで、私は小牛田に住んでいますけど、5時になると帰らねえみたいなの鐘が鳴ったりとか、それぐらい、私もハードではなくて、もっと身体に訴えかけるようなことだといいかないというふうに思ったりもします。

○本江副委員長

ありがとうございます。どうでしょうか、大体お話しされましたか。事務局には大変申し訳ないんですけど、ちらかったまま終わります。でも、それぞれの用意していただいた進め方、どういう経験であったのか、原発は原発の事実そのものというよりはそれをどういう位置づけで扱うのかという態度の話はできたと思いますし、やっぱり中心だった仙台ならではの、それをなぜ仙台がやるのかということについてはいろんな議論があって、やっぱり知らん顔はできまいということには合意ができたようには思います。中

心部、沿岸部の話はもう少しあってもよかったなという感じ。で、伝承の中でいろいろやらなきゃいけないことや追悼、記憶、発信というようなことも出てきたということで、まとめと重複する部分もあるかとは思いますが、補完的な議論ができたとは思いますが、これでいったん今日のディスカッションは閉じたいと思います。

委員長、お願いします。

○野家委員長

ありがとうございました。おかげさまでだいぶ方向性が見えてきたのではないかと感じています。

これまで3回議論してきた内容をもとにして、あと事務局から説明があると思いますが8月に市民の方を交えた市民参加イベントを現在企画しておりますので、それに我々としても、多少は時間がありますので、これまでの議論をもとにしてもう少し具体的な議論ができるような形で臨んでいきたいと思っております。

それでは、そのことを踏まえて次の議題に入りますが、市民参加イベント等の開催について、事務局から説明をお願いいたします。

○事務局（庄子課長）

それでは、資料2「市民参加イベント等の開催について」、ご説明いたします。先ほど資料1の中でもお話しさせていただきましたが、8月と9月にイベントの開催を予定しております。

目的は、中心部震災メモリアル拠点の基本構想策定に向けて、現在の検討状況を周知するとともに、幅広く意見を集め、今後の議論の参考とするためです。

概要ですが、市民の方々が議論に参加できる場として市民参加イベントを開催し、それを踏まえて、市民参加型の検討委員会を開催いたします。

市民参加イベントでは、中心部震災メモリアル拠点検討委員会委員の方、それから震災をはじめとした災害の記憶や経験の継承に取り組まれている専門家の方が、参加者と一緒に複数のテーブルに分かれて、中心部震災メモリアル拠点のあり方や役割、機能に関するワークショップを実施いたします。

後日開催する市民参加型の検討委員会においては、そのワークショップで出た各テーブルの意見を参考に議論を深めつつ、この会に限り傍聴者の方にも発言を求めて、議論にご参加いただきます。

では、先に8月の市民参加イベントです。8月3日土曜日、午後1時から5時まで。開催場所はせんだいメディアテーク1階のオープンスクエアです。参加者に関しては、東日本大震災の記憶や経験の継承に興味・関心をお持ちの方を対象に、50名程度で考えております。事前にお申し込みも募る予定です。なお、これは市民の方に限定はいたしません。興味のある方は、もちろん市民でない方もご参加いただけます。

内容ですが、まず、講演。委員や専門家の方からの講演を予定しております。講演者及び演題は調整中です。ワークショップは、参加者がこの検討委員会の委員、それから専門家の方と一緒に複数のテーブルに分かれて実施いたします。

次に市民参加型の検討委員会です。開催日時は令和元年9月1日日曜日、午後3時から5時です。開催場所は、メディアテークの1階オープンスクエアになります。傍聴者の方は、今回のように先生方の輪に入ることではなく、その後ろ側ということに

はなりますが、東日本大震災の記憶や経験の継承に興味・関心をお持ちの方を対象に 100 名程度。内容は、当日は中心部震災メモリアル拠点の役割・機能に関する議題を設定する予定で、この会に限り傍聴者の方にも発言を求めて、議論の参考とさせていただきます。

詳細が決まりましたら、チラシ、ポスター、市ホームページ、市政だよりなどでお知らせをさせていただきます予定です。

以上です。

○野家委員長

ありがとうございました。ただいま事務局のほうから二度、8月と9月の市民参加イベントについて説明がありましたが、何か皆さまのほうから質問やご意見がございましたら、遠慮なくお願いをいたします。よろしいでしょうか。

それでは、日程と場所は決まっておりますので、予定を空けておいていただくようお願いをします。

それでは、3番目の今後のスケジュールについて、事務局から説明をお願いいたします。

○事務局（庄子課長）

それでは資料3「今後のスケジュールについて」、ご説明いたします。

前回の第2回のときにもお示しをしておりますが、今回までの第3回であり方・コンセプトの検討をさせていただきました。次回、8月3日の市民参加イベント、9月1日の第4回検討委員会、10月の第5回検討委員会で今回のあり方を踏まえた役割・機能の検討をいたします。11月には世界防災フォーラムまたは仙台防災未来フォーラムでのシンポジウムを予定しております。年が明けて、令和2年の1月以降に具体像（機能）の検討をさせていただきたいと思っております。1月以降、6回、7回、8回と、夏ぐらいまでに報告書取りまとめ等ございますが、議論や検討の進行状況などでこちらのスケジュールは柔軟に対応させていただきたいと思っております。最後は令和3年、再来年の3月末までにパブリックコメントを経て基本構想を策定したいと考えております。

以上です。

○野家委員長

ありがとうございました。ただいま今後のスケジュールについて説明をいただきました。年号も変わって令和になりましたので、気を引き締めて今後のスケジュールをきちんとこなしていきたいと思っておりますが、何かこれについて皆さまのほうからご質問、ご意見ございましたらお願いいたします。よろしいでしょうか。

一応令和2年の夏ごろまでに通算8回の検討委員会を開いて、報告書を取りまとめる。その後パブリックコメント等を求めて、基本構想を策定するというふうなスケジュールになっていますが、大丈夫でしょうか。

では、これに沿って粛々と議論を進め、深めていきたいと思っておりますので、ご協力のほどよろしくをお願いをいたします。よろしいでしょうか。

それでは、「その他」とありますが、事務局から何かありましたらお願いします。

○事務局（庄子課長）

それでは、事務局から2点ほど連絡がございます。

まず1つ目は次回以降の日程でございます。しつこいぐらいに重ねておりますが、お手元の座席表の裏面をご覧ください。スケジュールのところにも書いてはございましたが、お手元の座席表の裏面に次回、市民参加イベントの日程と第4回検討委員会の日程を入れてございます。今回、中心部震災メモリアル拠点のあり方について一定の議論ができたということで、あとは委員長、副委員長等とも相談させていただきながらまとめさせていただきたいと思いますが、今日の議論で少し漏れてしまったところがございますら、事務局にメールでお伝えをいただければ、そちらも反映してまとめていきたいと思っております。

2つ目は、お帰りの際の出口ですが、今日は5時からでしたので、正面玄関が開いておりましたが、そちらはすでに施錠しておりますので、北側の玄関からお帰りください。

事務局からの連絡は以上です。

では、委員長、よろしく願いいたします。

○野家委員長

ありがとうございました。それでは、委員の皆さまのほうからも何かご発言なりご要望を、次の会もこういうふうな感じのレイアウトでいいかどうかとかを含めてですね。今日は副委員長のために椅子を用意していただきましたが、何かご要望、その他ありましたら、何でも構いませんので。よろしいでしょうか。

それでは、次回は8月3日の市民参加イベント、これはこの市役所ではなくてメディアテークのオープンスクエアになりますので、また具体的な連絡は事務局のほうからあると思いますが、よろしく願いいたします。

それでは、本日もご協力ありがとうございました。事務局のほうに引き継ぎます。

○事務局（高橋室長）

本日は長時間ご議論いただきまして、ありがとうございました。

以上をもちまして本日の委員会を締めさせていただければと思います。どうもありがとうございました。